

# 小論文

**【問題】** 次のエッセイを読み、その内容を、傍線部の語句4つ全部用いて、600字程度でまとめなさい。

ベルリンのクロイツベルク地区にあるコットブッサー・トーア駅は、夜は避けたい地下鉄駅だ。酒瓶を片手にプラットホームをよろめき彷徨う男たちの目つきが暗すぎる。麻薬の売買も頻繁に行われている。

この駅のすぐ側そばにある小学校を訪問することになった。招待してくれたのは元教員のAさんで、小学生たちがベルリンに住む社会人、特にドイツ社会で自分の場所を見つけた外国人と対話する機会を作る活動をしている。

ベルリンは最近ますます住み分けが進み、この小学校にはドイツ人の子供がいなくなってしまったそうだ。その結果、子供達たちはベルリンに住みながら接触できるドイツ人は担任の先生だけという環境に置かれている。ちなみに彼らのほとんどはドイツで暮らし始めて三世代以上たっていて、ドイツ語が不自由なわけではない。

案内されたのは小学校の図書室。四方の壁が本棚で、中心にはカラフルな椅子や巨大なエアークッションが置かれていて楽しい雰囲気だった。十歳くらいの子供達が二十人ほど集まって来た。

「トルコ語を話せる人、手を挙げてください」と言ってみると、数人を除いてほとんどの子供が手を挙げた。「アラビア語が話せる人は」と訊くと、残りの数人が手を挙げた。つまり全員バイリンガルなのだ。

わたしはドイツ語で書いた詩と短いエッセイを朗読した。朗読を聴くのは苦手かなと思ったが、どうやら子供というもののはどの国でも読み聞かせが好きらしく、じっと耳をすまして聴いている。

Aさんが「質問ありますか」と訊くと、クッションの真ん中に堂々とあぐら

をかいて座っていた女の子が手を挙げて、「北朝鮮に行ったことがありますか」と言った。朗読の内容とは無関係だったが、わたしの顔を見て東アジアに思いを馳せた結果、まず浮かんだ問いなのだろう。まだ十歳なのに、さすが国際社会の紛争の真っ只中で生きるベルリンっ子だなと思った。

北朝鮮には行ったことがないが韓国側から国境の近くまで行ったことはある、と答えるとその少女は真剣な顔で、「その国境を警備している兵隊ですけど、あれはナチスの兵隊ですか」と訊いた。Aさんが呆れて「君ねえ、時代が違おうでしょう」と口を挟んだ。確かに時代も地理も頭の中で混乱しているが、自分の力で世界史と現代の繋がりを理解しようとしている。

クッションの片隅に瘦せた男の子が座っていた。体重が軽く姿勢が悪いので、あぐらをかいてもすぐ後ろにひっくり返ってしまう。Aさんに「ちゃんと座って話を聞きなさい」と注意されると、反抗的な目でAさんを睨んだ。その子が手を挙げて、「本を書く時には最初に構成を全部決めてから書き始めるんですか」とまともな質問をぶつけてきた。わたしは喜んで、できるだけ丁寧<sup>にら</sup>に答えた。ところが回答が少し長びくと子供達はざわつき始めた。読み聞かせは好きでも、人の話を聴くのはそれほど得意ではないのか。それともわたしの口調にも大人独特の「ためになる話の押し売り」調が紛れ込んでいるのか。

わたしが答え終わると、同じ子がまた手を挙げたのでまた創作についての質問だろうと思って当てると、「ブルース・リーの妹、知っていますか」という予想外の質問が飛びだしてきた。Aさんが「君ねえ、話の脈絡<sup>にら</sup>ってものがあるでしょう」と言ってため息をついた。

現代っ子は映像を伴う多量の情報を浴びながら成長していく。東洋的な顔を見た瞬間、活性化されるデータの総量は何ギガバイトくらいだろう。無数のイメージをつなぎ合わせて、自分なりに世界を説明するストーリーを作ってはほぐし、作ってはほぐす「思考」という高度な技術を学ぶのは容易ではない。自分探しを避けて通れない年齢になれば悩みも深まり、国粋主義や外国人排斥思

想やイスラム原理主義など分かりやすいシナリオに騙<sup>だま</sup>されてしまう人も多い。  
たとえ答えは出なくても、自分の頭で考えることを放棄しないで成長してほしいと、柔軟で活発な脳味噌<sup>のうみそ</sup>を持った小学生をみていてつくづく思った。

(出典：「多和田葉子のベルリン通信」 『朝日新聞』2018（平成30）年6月17日）

たわだ・ようこ 1960年、東京生まれ。小説家、詩人。82年からベルリンに住み、現在ベルリン在住。93年、「犬婿入り」で芥川賞。2011年、『雪の練習生』で野間文芸賞。ドイツ語での文学活動に対し、16年度のクライスト賞受賞。近刊に『地球にちりばみられて』。